125 渡嘉敷ペークー（イ）

（十日月・嘘の名人）

昔の場合はみんな、日雇いを募集して首里城のリンの池（龍譚池）といって、大きい沼があった。みんな田舎から、今日はどこどこの部落から作業に来る、明日はって。

渡嘉敷ペークーといって有名な、名物な。

「明日は何時までに、何名何名、何十名連れてこい」と作業をやって。ああ言うとって、わざと遅らして。時間は、九時集合のやつは、あるいは十時集合のやつをわざと一時間も二時間も遅らせて行って。また、「何だいお前、時間励行もしない。今度はお前、そういうことならずっと遅くまで使う。その縮まった分は伸ばさせよう」と。

「もう仕方がありません。そうなったら今日はもう、お月さんが上がるまで。それで遅れたのを取り戻すから。お月さんが上がるまでやります」と言ったら、

「本当にやるか」と言ったら、

「本当にやります」。そしたら、十日であったらしい。十日の月は三時頃には上がってくるらしいのよ。さあ、勝連部落から来ているものだから、それで、

「みんな上がりなさい」と。

「何だ、このやろう。お前遅くまでやると言ったのに」

「はい、遅くまでやりましたよ。ちゃんと約束通り。お月様はもう上がったよ。さあ、帰りなさい」。そんでやられた。

それでまた、片一方は、首里から那覇に何か会があったらしいんだよ。だから、王から今度はいろんな、冗談みたいな、笑いごとみたいな、とにかく、いろんなジャス話は嫌いなやつがあるから、第一は『饅頭にはほう』と言うてな、沖縄では。こういうふうなんですよ。場合によって、またこの、首里に行く場合だから、それ見た場合には罰金五百円といったことで。こんな、饅頭の話をやった場合。饅頭というところ、他府県にもある。それともう一つは『焼ける』。火災。焼ける。火よ、火災。あんなのもまずいから、火の話もしないようにといって。

それで、途中にホーギという木があるさ。だからま

だ、渡嘉敷ペークーは、わざわざこの枝を折ってきて、
「素晴らしいね。王様、これ、何という木かあまり見たこともないが」と言ったら、向こうは、
「これ、ホーギという木だ」。言わされて、
「はい、五百円」。
　ほいたらまた『焼ける話』。火の話もせにゃいかん。わざっとまた、
「王様珍しいさ。ちょっとそこの、こうやってね、トイレなんか行った場合は、台所で木で作ってある釜でどんどん飯を炊いておる」と。
「何、木で作ってある釜で飯を炊いておった」
「そうよ」って。
「それ、焼けるがね」って。また王様、焼けるだろうと、またもうやられて。何とか言ったが、みんなあれにやられて。渡嘉敷ペークーに。だからこの、取った物は、今度は税金は、
「これ、わしがもうかるもんではない。みんなで分け合って食べよう」と。

字北波平　　賀数長安